

日本の被爆トラウマの世代間伝達—否認・依存・断絶— Transgenerational Transmission of Atomic-Bomb Trauma: Denial, Dependency and Splitting

荻本 快 OGIMOTO, Kai

● 相模女子大学学芸学部
Sagami Women's University



トラウマの世代間伝達, 被爆トラウマ, 心理療法

transgenerational transmission of trauma, atomic-bomb trauma, psychotherapy

ABSTRACT

この試論では、日本の被爆トラウマが世代間伝達していく構造と力動に関する論考を行った。日本の被爆トラウマが世代間を伝達していく時には、否認を基盤として、次の世代への依存と投影同一視が起きることや、世代間の断絶や生存者同士の分裂によって、無意識的にトラウマが伝達することを論じた。最後に心理療法における治療課題を提示した。

This essay attempted to discuss the structure and dynamism of transgenerational transmission of Japanese atomic bomb trauma. When atomic bomb trauma transmits, 1) dependence and projective identification toward next generation, 2) disconnection of generations and split between survivors occur. This happens based on an ego function of denial, and thus psychological trauma transmits unconsciously. At the end, therapeutic hypothesis of psychotherapy and tasks for conducting future research was showed.

1. 被爆トラウマ

2012年3月に行われた日本集団精神療学会第29回大会の特別講演において、精神分析家であり組織コンサルタントであるDavid Gutmannは、2011年3月に起きた福島第一原子力発電所の事故に対する日本社会の反応は運命論的に見ると述べた(Gutmann, 2012)。

彼は、事故を甘受し、運命論的に捉えている現代日本を分析対象として、その背景に、二つの無視されている創始のトラウマがあることを指摘した。一つめは彼が「地質学的トラウマ」とよぶ、日本列島がプレートの上に乗っており、天災が絶えなかったことのトラウマである。もう一つが、広島と長崎に原子爆弾を投下されたという被爆のトラウマである。この二つのトラウマが現代日本において繰り返し拒絶され、無視されてきたことよって、トラウマが世代間に伝達し、その結果、今回の福島第一原子力発電所の事故とその後の対応という、自己破壊的な反復行為が生じたと示唆している。

トラウマの世代間伝達とは、ある世代におけるトラウマの体験が、無意識的に第二世代、第三世代へと何らかの方法で伝達することである(Volkan, 2002; Faimberg, 2005; Kogan, 1995)。

本論が着目するのは、日本において、被爆のトラウマが、どのような機構によって世代間伝達しているのかという点である。本稿では、日本の被爆トラウマが世代間伝達していく構造と力動について論考し、世代間伝達したトラウマに対する心理療法における治療仮説と研究課題を提示する。

2. トラウマの世代間伝達

2.1 否認

トラウマの世代間伝達が始まる基盤となる心的機制は、否認である。否認とは現実を直面しないこと、現実の認識を拒むために用いられる防衛機制である。自らが被ったトラウマを生存者が否認すると、そのトラウマは無意識的に次の世代、また次の世代へと伝達されていく(de Mendelssohn,

2008; 荻本, 2009)。

佐藤と田口(2015)は、日本での公害に対する企業と政府の対応の歴史を描いた上で、福島第一原子力発電所の事故に対する日本人のふるまいには、日本における公害の否認の積み重ねが関連していることを指摘した。福島第一原子力発電所の事故とその後の対応には、政府の精神病理が反復して現れていると述べ、そこにアルチュセールの言う否認と回帰のメカニズム(Althusser, 1994; 西川・大中・今野・山家訳, 2010)があることを見出した。

Gutmann(2012)は、先に述べた二つのトラウマを日本人は集合的無意識として共有しているが、二つのトラウマは否認されており、むしろ福島第一原子力発電所事故とそれ以降の日本人のふるまいはトラウマの行動化に見えると述べている。つまり、日本人の原発事故へのふるまいは過去のトラウマを亡きものにしようとする挑戦なのではないか、と問いかけている。

このように世代間伝達が生じる基底には、生存者による否認の防衛機制があるが、次の世代に伝達していく際には二つの機構があると考えられる。

2.2 次の世代への依存

一つめは、これまで言われてきたように下の世代への依存による伝達である(Kogan, 1995; de Mendelssohn, 2008)。最初に心的外傷を被った世代が、悲哀と攻撃性による自己破壊を防ぐために、自らが感じ難い悲哀と攻撃性をコンテインしようとして、無意識的に自らの子どもを利用する。その際、親の投影同一視の過程によって、親が被った心的外傷は次の世代へと伝達されていくのである。Lifton(1986; 柁井・湯浅・越智・松田訳, 2009)は、原爆や強制収容所の生存者が、死者の身代わりを求めするために、あるいは生物としての連続性を保つために、戦後にいち早く結婚(もしくは再婚し)、子どもを設けようとしたことを報告している。

こうして得られた子どもは、死者の「ろうそく(de Mendelssohn, 2008)」として時には死者と同じ名前が付けられ、生存者の悲哀と攻撃性を直接

的・間接的にコンテインすることとなり、生存者のトラウマが次の世代へと伝達していく。

2.3 共同体の断絶

もう一つの機構が、共同体の断絶による、トラウマの無意識的な伝達である。本稿では、これを福間良明による二つの著作『戦争体験』の戦後史—世代・教養・イデオロギー—(2009)、「焦土の記憶 沖縄・広島・長崎に映る戦後」(2011)を手がかりに論考する。これらの著作の中では、生存者が経験した事実やその記憶に「体験」という言葉があげられている。しかし本稿では、生存者が過去にその場に居合わせて、ある程度まとまったエピソード記憶になっているものを「経験」、生存者が過去や現在のある時点で、身をもって感じていることを「体験」として区別したい。そして、生存者が過去を思い出して、あたかもその時にいるかのようにその時の体験を思い出し、その時と同じ感覚あるいはその時と似たような感覚を持つことを「再体験」と言うことにする。

2.3.1 体験の語りがたさ

福間(2009)は、「わだつみ会」とそれに関わる知識人の戦後の変遷を追う中で、1922年に生まれた安田武を代表とする戦中世代が「戦争体験の語りがたさへのこだわり」があったことを指摘している。安田は学徒出陣の生存者であるが、安田と戦後に生まれた世代との関わりは、被爆トラウマの世代間伝達を理解する上でも意義があると思われる。

福間も引用しているように、安田(1963)は「戦争体験は、長い間、ぼくたちに判断、告白の停止を強いつづけたほどに異常で、圧倒的であったから、ぼくは、その体験整理の不当な一般化を、ひたすらにおそれてきたのだ。抽象化され、一般化されることを、どうしても肯んじえない部分、その部分の重みに圧倒されつづけてきた」(p. 92)と述べている。

戦争での体験が異常で圧倒的であったが故に、一般化されない部分、語りがたい部分の重みによって、生存者は告白を停止せざるを得なく、自

らの体験に生存者は圧倒され続けたのである。彼らにとって語りがたい部分には何があったのか、福間(2009)は安田(1963)を「ところが、奇妙といえば奇妙、当然といえば当然のこのようだが、私たちの虚無感、空白感のなかには、いかりが混在する。無力感の底で、暗いいかりが焰を燃やしている」(p. 34)と引用し、安田ら戦中世代が告白を停止せざるを得ないときには、彼らが虚無感と空白感を感じており、さらにその底には「暗いいかり」が燃えていることを読み取っている。

経験の底にある「いかり」は語りがたい。残された者の怒りは死んだ者にも向けられるからである(de Mendelssohn, 2008; Stoddard, Katz, & Merlino, 2010; 東日本大震災支援合同チーム訳, 2014)。「なぜ私をこの世の中に残し、あなたが先に死んだ」と口にすることは難しい。

そもそも、言葉にする行為自体、一般化する作業である。どれだけ言葉を尽くしても言葉から漏れてしまうもの、言葉にし得ない体験の個別性がある。安田ら戦中世代はそこにこだわったと考えられる。

さて、安田はその著作を通して福間(2009)に語りがたさの底にある「いかり」を伝えることができたが、戦中世代のすぐ後の世代はそれを受け取ることができなかった。それを福間(2009)は「若い世代には、年長者の戦争体験の語りは、自分たちとの認識の共有というよりはむしろ、若い世代の発言を封じ、『おれたちはこういう目にあっただ、お前たち知ってるか』と言わんばかりに抑圧しているように感じられた」(p. 161)と引用している。

戦中世代が戦争を語る際に、彼らは、語りがたさを持ちながら、精神的には体験に圧倒されている。それを聴く若い世代は、戦中世代から抑圧され圧倒され、語ることを封じられるように感じただのである。実際には、戦中世代をして戦後生まれの人間に対して「私達の方が大変な時代を生きただ」という体験の圧倒性・優位性をふりかざすことが起きた。これは、戦中世代が経験を語りながら、精神的には体験から圧倒されていることが、正に語りを聞いている若い世代との関係

に置き換えられ、年長者が無意識的に若い世代を圧倒することで、自らが内的に圧倒されていることを、非建設的に克服しようとする試みだといえることができる。これこそが投影同一視である。年長者の人格内で起きていることが、対人関係の中で、他者を巻き込みながら再演される。それと同時にGutmann (2012) の言う「挑戦」が起きている。戦中世代が若い戦後世代を圧倒しようとすることは、自らが精神的に圧倒されているトラウマに挑戦しようという企てだったのではないか。

2.3.2 断絶による伝達

戦中世代の次の世代には、彼らが威圧として体験した戦中世代の言動の奥に、安田が言う「いかり」や罪悪感と恥があることを想像することは難しかった。このため、この世代は、戦中世代の戦争責任を追及するようになる。

政府の戦争責任は問われるべきだろう。しかしながら、本稿の観点では、戦中世代が戦争体験を語る場で、次の世代が戦中世代の「戦争責任」を問うようになった契機には、次の世代が戦中世代の戦争体験に圧倒されたことがあるのではないかと考えられる。次の世代が圧倒され、自己を小さく感じた後に、戦中世代の威圧感の奥にあるものに目をつむり、その場での自分たちの優位性を獲得しようと、戦中世代への挑戦として「戦争責任」を持ちだした側面があったことは否定できない。つまり、次の世代は「戦争責任」という言葉で合理化を行い、戦中世代の威圧感の奥にあるものを受け取ることの難しさを否認していたと思われる。語りの場では、「戦争責任」という言葉は、防衛に使われていたのではないか。その結果、戦中世代は語りがたさに固執する一方で、次の世代は戦中世代の戦争責任を主張し、平和運動を主目的とするという、戦中世代と戦後世代の断絶に至ったと解釈する。

集団においてトラウマが扱われる時には、個人が集団で共有し難いような個別的な体験を持っており、個人が体験によって圧倒され主体が支配されているという構図が、集団力動における支配—被支配に置き換えられ、集団は分裂することがあ

る (Kissen, 1976; 佐治・小谷・都留訳, 1996)。ある生存者が「自分はその人より (あなたより) 大変だった」あるいは「自分はその人より (あなたより) ましだった」と言うことで、言葉に失得ない部分である罪悪感と恥を言葉にすること、あるいは罪悪感と恥を受け取ることを防衛するのである。これは東日本大震災以後にも見られていることである。格差を利用して、一人ひとりの体験の個別性が無視される。あるいは自らが属する集団を分裂させることで、自分の経験の奥にある罪悪感と恥を語らなくてすむようにする。安田武らが戦争体験を語った場においては、戦中世代と戦後世代が分裂・断絶したのである。

福間 (2009) は、戦中世代と戦後世代の断絶の後、戦没者の死を反戦イデオロギーとして流用することと同時に、「殉国の至情」という感傷に用いられる傾向が強まる中で、戦争の物語が分かりやすいストーリーになっていく経緯を、映画「きけ、わだつみの声」の変化を通して示した。観客にとって受け取りやすく、分かりやすいストーリーが伝承されるようになり、これらの経緯で、安田ら戦中世代が格闘した「語りがたさ」やその底にある「いかり」は伝達されず、戦中世代はますます閉じこもり、口が重くなっていった。これを福間 (2009) は、「『継承』という断絶」という言葉で的確に捉えている。

本稿ではさらに、戦後世代が受け入れられるストーリーが継承され、生存者と次の世代が断絶したことによって、トラウマの治癒は進まず、断絶によってむしろトラウマは次の世代に無意識的に伝達されたと主張したい。de Mendelssohn (2008) が言うトラウマの世代間伝達があるとするならば、トラウマが語られないままになることで、無意識に次の世代に伝達されることが起きる。その結果、次の世代、孫の世代で、トラウマの行動化が起きる。Gutmann (2012) は、それが今回の福島第一原子力発電所事故の発生とその後のふるまいに現れていると言うのである。安田が内包していた「いかり」、あるいは個別的な罪悪感と恥の部分は、伝承されないままに、戦争トラウマの事実、被爆の事実は否認・無視される。その一方で

トラウマは共同体内を浮遊し、今も無意識的に世代間に伝達されているのではないか。生存者と次の世代の断絶によって、むしろトラウマは伝達されたと思われる。

2.3.3 政治行動による断絶

次に、2011年に出版された『焦土の記憶 沖縄・広島・長崎に映る戦後』の中で、福間（2011）は被爆経験の伝承においては、世代的な断絶は起きなかったが、共時的な断絶は起きていたことを示唆している。彼は、松元寛が1961年に行われた研究集会の中で、「原水爆禁止運動のこれまでの歴史を振り返って、…運動として当然持つべき二つの面、即ち思想運動としての側面と政治行動としての側面のうち、前者が著しく弱い」（松元、1995, p. 19）と述べたことを引用している。

占領下では原爆被害について公に言葉にすることができなかったが、第五福竜丸のビキニ事件以後、原水爆禁止運動が高揚していく。被爆者の証言はこれらの政治行動と強く結びついており、被爆経験を証言する被爆者の多くが政治行動に打ち込んでいた（川村、2011；山本、2015）。その一方で、被爆経験が自己に及ぼす影響を探求することを通して、その人間への意味を問うという思想運動の側面が失われていた。そのため、被爆経験を語る事が政治行動へと吸収される構造があり、政治行動に違和感をもつ被爆者が自らの被爆経験を語る事が難しい状況が作り出されていったと考えられる。福間（2011）は、ヒロシマ・ナガサキが政治化していくことで、当事者の心情が抑圧される場面があったことを指摘している。被爆者の体験では、平和運動と早くに結びついて体験を語る被爆者と、口をつぐんでいく被爆者との間で、断絶が起きたと思われる。

また、福間（2011）も引用しているように、松元（1982）は、被爆者の中に経験を語ろうとしない者が多いのには、占領期のアメリカ軍による制約、その後は放射線の後遺症の問題によって自身と子孫の結婚の障害になることを恐れていたことを説明し、その奥に、「もっと大きな力が被爆者たちの心に重たくのしかかっていた、…ひと口で

いうならば、生き残ったものの後ろめたさともいべきもの」（松元、1982, p. 6）があることを説明している。

また、広島の実験の生存者に体系的な面接調査を行ったLifton（1968；柘井他訳、2009）も、原爆の生存者の特徴に、強い罪悪感・罪責感があることを指摘している。

このように、安田武ら、わだつみ会の戦中世代は無力感や虚無感の底にある「いかり」によって語りがたさを感じていたが、広島の実験者は「後ろめたさ」によって経験の語りがたさを感じていたのである。被爆経験を話すことが、政治行動と結びつく状況の中で、被爆者の語りがたさの中に内包されていた「後ろめたさ」や罪悪感は語られることなく、多くの被爆者の中に留まり続けたと思われる。

田中とカズニック（2011）は、1950年代のアメリカの「原子力平和利用」戦略の中で、1955年に行われた原水禁大会では核の平和利用としての原子力発電が支持され、「日本の反核兵器運動と反原発運動」が最初から乖離し（田中・カズニック、2011, p. 61）てしまったことを浮かび上がらせた。この経緯を認識すると、福島第一原子力発電所事故の後、被爆者はももとの被爆トラウマに関する後ろめたさだけでなく、自らが支持した原発が福島で事故を起こしたことへの後ろめたさという、二重の後ろめたさを内包していると思われる。

さて、広島の実験の伝承に関して、福間（2011）はわだつみ会で起きたような世代間の断絶は起きなかったと論じている。その理由として、原爆は1945年8月6日および8月9日という過去の問題だけでなく、後遺症や被爆二世の医療援護や生活援護といった現在進行の問題として捉えられたことで「必然的に体験への関心と政治志向が両立」（福間、2011, p. 414）し、わだつみ会の戦中世代と次の世代の断絶のような事態が、被爆経験の伝承の際には起こらなかったと説明している。

しかし、先に述べたように、被爆を証言することが政治行動と結びついたことで、共時的な断絶

は起きていた。むしろ、世代の断絶は起きなかったが、生存者が、現在進行形の課題に取り組もうとしたことで、被爆経験は「過去」の問題ではなく、「現在」の問題として取り扱われた。これによって、政治行動の側面で生存者と次の世代は連携をすることができたが、その分、政治に過度にのめりこんだことで、被爆経験の捉えなおしが進まなかったと思われる。福間（2011）も「〔被爆体験者は〕その『現在』志向のゆえに、『自らの過去を問いただす』という姿勢はやや薄れがちだった。被爆体験論は、若い世代との連携を可能にしやすかった反面、『自己への問い』を捨象しがちな危うさも帯びていたのである」（p. 397）と指摘している。

つまり、広島に生存者においては、世代間の断絶というより、現在の政治行動に焦点を当てることによって、世代の断絶は起きなかったが、その分、過去における「後ろめたさ」を否認し続けることになったと思われる。わだつみ会の戦中世代と戦後世代の対立では、安田らが平和運動に注力しようとする次の世代と連携をしないことで、戦争体験の中の語り難い「いかり」を感じ続けた。しかしながら、被爆者のダイナミズムにおいては、被爆経験を語る事が政治行動と結びつき、「現在」の政治的問題に焦点をあて、次の世代と連携したことで、「過去」の「後ろめたさ」が否認されたのではないか。ここに、行動化の防衛規制による、罪悪感と恥の否認を見ることができる。生存者が次の世代に依存することによって、生存者が自らの罪悪感と恥をコンテインしようとした力動があったと解釈することもできよう。こうして、被爆生存者の経験の奥にある罪悪感や恥といった感情は表現されず、結果として、被爆トラウマは世代間伝達したのではないか。

3. 心理療法における課題

ここから、被爆トラウマに関する治療課題を、日本人に対する戦争トラウマ・災害トラウマの心理学的治療に取り組んできた精神分析的システムズ理論（小谷，2008，2010）に基づき論考する。

個人の世代間伝達トラウマは、心理療法によって治療される。治療では、喪失への悲哀と、喪失した対象への葛藤そして罪悪感と恥が徹底操作される必要がある（de Mendelssohn, 2008）。

トラウマに対する心理療法を実践していく際の前提として、治療者とクライアントとの間に確かな治療同盟（小谷，2010）が築かれていることは常に確認されなければならない。心理療法の過程で、クライアントは錯誤行為やあからさまな否認を呈するようになる。外傷体験にまつわる人間関係が治療者との関係に置き換えられる。転移である。また、戦争や災害に関連した夢、連想、白昼夢を報告する。これらが徹底操作の入り口となる。これらの現象が共有された時に、治療者はクライアントとの間で、問題となるトラウマを治療する意志を確認し、さらに集中的な治療に入っていく。

外傷体験とは、これまで言語にし得なかった体験の個別的な部分である。外傷体験が語られる時に否認や解離が起きるのは、クライアントがあまりに強い感情（罪悪感や恥）を感じるので、情動とそれに関する記憶を否認せざるを得ないからである。そうすることで、自己の統制感が保たれる（中井，2015）。治療者はクライアントの否認と解離を指摘し、即座に問題にするか、あるいは面接の過程でいずれ取り扱えるように、楔を打っておく必要がある。

さて、治療者とクライアントが、楔を打った箇所から外傷体験に入っていく際には、クライアントは過去を再体験する。そこには、戦争に関する経験のどうしても言葉にできない部分や、語り難い体験、言葉にし得ない体験が複合的に詰まっている。安田（1963）が体験していた「いかり」、松元（1989）やLifton（1986；柘井他訳，2009）が指摘していた「後ろめたさ」や「罪悪感」である。この再体験が起きている時にこそ、心理療法の意味がある。なぜなら、心理療法では、たとえクライアントがその時に再体験していることを言葉にできなくても、治療者がクライアントと共に在ることができるからである。心理療法の場において、治療者は、クライアントが再体験していることに関心をもち、クライアントの体験に関心を

持っていることを示すことができる。治療者が助けるのは、クライアントが分かりやすく伝わるような言葉で話すことではなく、クライアントが再体験によって圧倒されそうになる最中に、その体験に関心を持つ人間が存在することを伝えることである。そして、治療者が支持するのは、情緒的に圧倒された経験について、何が起きたのかという事実の確認と、そこで何を感じたのかということ、そして今の自分から見て過去の自分をどのように捉えるかという現在と過去の分化の作業である(小谷, 2016)。この作業が不可欠なのは、クライアントは情緒的に圧倒されている瞬間には、過去と現在を圧縮して認知してしまうからである。それ故に、この過程を繰り返し辿ることで、クライアントは経験の根底にある「罪悪感」と「恥」を安全に語るができる。心的外傷が再体験される瞬間にとどまり、クライアントが語ることで主体性を獲得していくことを支持し、損なわれた自我領域が再分化させていく営みを続ける。これが心的外傷の治療の根幹となる。

世代間伝達したトラウマに苦しむクライアントには、その影響は、上の世代との関係もしくは下の世代との関係、あるいは現在の人間関係に現れると思われる。これらの人間関係での傷つきは、治療者とクライアントの転移に現れるだろう。心理療法過程で示される、クライアントが情緒的に圧倒される瞬間を取り扱っていくことが肝要である。それと同時に、歴史的な視点による家族史の再編成の作業を行っていくことが求められる。

この試論では、日本の被爆トラウマが世代間伝達していく構造と力動に関する論考を行った。日本の被爆トラウマが世代間を伝達していく時には、否認を基盤として、次の世代への依存と投影同一視が起きることや、世代間の断絶や生存者同士の分裂によって、無意識的にトラウマが伝達することを論じた。最後に心理療法における治療課題を提示した。

今後、実践研究を展開させていく際には、以下の研究課題が克服される必要がある。

- 1) 被爆トラウマの世代間伝達が日本において有意に存在するかどうかの疫学的調査

- 2) 心理療法実践による、被爆トラウマの心理療法による治療技法の精緻化
- 3) 生存者に対する治療と第二世代・第三世代への治療の異同を明らかにする研究
- 4) 生存者に対する心理療法、第二世代・第三世代への心理療法の効果研究

引用文献

- Althusser, L. (1994). *Sur la philosophie*. Gallimard. (アルチュセール, L. 西川 長夫・大中 一彌・今野 晃・山家 歩 (訳) (2010). 再生産について 上下 イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置 平凡社)
- Faimberg, H. (2005). *The telescoping of generations*. London: Routledge.
- 福岡 良明 (2009). 「戦争体験」の戦後史 世代・教養・イデオロギー 中央公論新社
- 福岡 良明 (2011). 焦土の記憶 沖繩・広島・長崎に映る戦後 新曜社
- Gutmann, D. (2012). A revealed work area for group psychotherapy and group processes: The nuclear accident of Fukushima (March 2011). 集団精神療法, 28, 131-143.
- 川村 湊 (2011). 原発と原爆—「核」の戦後精神史 河出書房新社
- Kissen, M. (1976). *From group dynamics to group psychoanalysis: Therapeutic applications of group dynamic understanding*. Washington: Hemisphere Pub. (キッセン, M. 佐治 守夫・小谷 英文・都留 春夫 (訳) (1996). 集団精神療法の理論—集団力学と精神分析学の統合 誠信書房)
- Kogan, I. (1995). *The cry of mute children*. London: Free Association Books.
- 小谷 英文 (2008). *ダイナミック・コーチング：個人と組織の変革* PAS心理教育研究所
- 小谷 英文 (編著) (2010). *現代心理療法入門* PAS心理教育研究所
- 小谷 英文 (2016). *Crisis! Whose? 危機! 誰の?* 国際力動的心理学学会 第22回年次大会 大会基調講演 東京 11月3日.
- Lifton, R. J. (1986). *Death in life: Survivors of Hiroshima*. New York: Random House. (リフトン, R. J. 榎井 迪夫・湯浅 信之・越智 通雄・松田 誠思 (訳) (2009). ヒロシマを生き抜く—精神的考察 岩波書店)
- 松元 寛 (1982). 広島長崎修学旅行案内—原爆の跡をたずねる 岩波ジュニア新書 岩波書店
- de Mendelssohn, F. (2008). Transgenerational transmission of trauma: Guilt, shame, and the "heroic dilemma." *International Journal of Group Psychotherapy*, 58, 389-401.
- 中井 久夫 (2015). 戦争と平和 ある観察 人文書院

- 荻本 快 (2009). 海外文献紹介: Transgenerational transmission of trauma: Guilt, shame, and the "heroic dilemma." 集団精神療法, 25, 241-245.
- 佐藤 嘉幸・田口 卓臣 (2015). 脱原発の哲学 人文書院
- Stoddard Jr., F. J., Katz, C. L., & Merlino, J. P. (Eds.) (2010). *Hidden impact: What you need to know for next disaster: A practical mental health guide for clinicians*. Massachusetts: Jones & Bartlett Learning. (スタッダード, F. J., カッツ, C. L., & メリーノ, J. P. 小谷 英文 (監訳) 東日本大震災支援合同チーム (訳) (2014). 不測の衝撃—危機介入に備えて知っておくべきこと 金剛出版)
- 田中 俊幸・カズニック, P. (2011). 原発とヒロシマ—「原子力平和利用」の真相 岩波書店
- Volkan, V. (2002). *The third reich in the unconscious*. New York: Brunner.
- 山本 昭宏 (2015). 核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ 中央公論新社
- 安田 武 (1963). 戦争体験：1970年への遺書 未来社